

巻 頭 言

供給者側と需要者側

医療の世界から日本社会を眺めた場合、日本の社会は供給者側と需要者側に分けることができる。しかし、そのバランスを考えてみると、あまりにも供給者側優先の世界であることが改めて解る。「患者中心の医療」等がいわれる中において、実は供給者優先になっていることが非常に多く、それが問題ではないかと感じている。

このような問題を解決するためには、医療の世界においてもより多くの患者さんの意見を聞くべきではないだろうか。しかし、医療の中で物事を改革していくためには、供給者側と需要者側とのバランスが必要である。供給者側と需要者側とが議論をすることにより価値が生まれ、お互いの立場に立って考え、理解することに意義があると考え、医療者側と患者側（患者を含めた一般市民）とが、双方の立場を理解しながら医療を良い方向に変えていくことこそが望まれる姿といえる。実際に行動することが大切であり、あれこれと苦勞することにより医療の世界に留まらず、社会において関係するいろいろなことが見えてくる。その中で何をすれば良いのかに気づくこと、このことが非常に大切であり、価値感や充実感となる。机上だけで考えるのではなく、実際に体を動かすことが大切である。

医薬品等安全対策について供給者側である医療従事者及び需要者側である患者との間では、どのような情報が必要かということについて述べる。医薬品における安全対策情報のリスクコミュニケーションに関する諸課題については、「薬害肝炎事件の検証及び再発防止のための医薬品行政のあり方検討会」最終報告においても指摘されており、喫緊の課題である。情報が適切に共有されない場合、その改善に向けての課題は情報提供側（供給者側）にあると考えるべきである（「平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業 患者及び医療関係者との医薬品等安全対策情報のリスクコミュニケーションに関する研究報告書」より）。さらに、医薬品のベネフィットとリスクとのバランスについては、「国民、患者・消費者」（需要者側）に対して、科学的不確実性を考慮した十分なリスクコミュニケーション、すなわち患者の健全な「医療決定」における「説明」と「関与」の一層の進展が必要である。そのためには、安全性情報の「透明性」と「信頼性」が担保されるべきである。供給者側がどんなに良い情報提供と考えても、需要者側の要求と一致しなければ意味がないといえる。供給者側、需要者側ともにお互いの立場に立ち議論し、理解を重ねていくことの必要性がここにあるといえる。このような議論の繰り返しが医療を変えていくことになる。目立たないことであるが、とても大切なことである。

現在では院外処方箋を応需し調剤を行う供給者側である保険薬局と需要者側である患者、あるいは患者の家族とが納得して後発医薬品を使用する体制が構築されている。今後は供給者側と需要者側とで議論を重ねることにより、構築した体制の「質」をさらに高める努力が問われている。

2017 年 5 月

日本ジェネリック医薬品・バイオシミラー学会理事
河北総合病院薬剤部長

折 井 孝 男